

“平和を賜え 新たな年に”

大村 恵美子

こう祈りつつ歌い終えた第 94 回定期演奏会でした。ともかくも、東京テロも実現することなく、迎えることのできた 2004 年。世界各地で治安が深刻化し、暴力に襲いかかられて命を落とす人々の激増する新年は、「めでたさも中ぐらい」どころではありませんが、平和への決意を新たに、私たちも一歩を踏み出さなければなりません。「アメリカのイラク攻撃は、国際法に違反する戦争なのだから日本は協力してはいけない。そして協力しなければ、二人(の日本人外交官)は死ななくて済んだのです。二人は小泉首相の間違った政策の犠牲者なのです」(浅井基文氏・明治学院大学国際学部教授)。この認識に日本人が立たなければ、日本はこれまで友人だったイスラム圏の人々の敵となり、びったり友人のはずのアメリカ人をさえカタストロフに追い込むこととなります。これが新年に踏み出す第一歩の基本姿勢です。

2007 年の《マタイ受難曲》、具体策の立ち上げ

さて、合唱団について考えれば、新年 5 月の第 95 回公演から第 100 回までの 6 つの定期演奏会を経て、2007 年春に第 101 回として《マタイ受難曲》公演を予定しています(下欄参照)。私自身は、もっぱら経済的な理由から、1982 年に初めて行なった《マタイ受難曲》演奏(創立 20 周年記念・第 51 回定演、新宿文化センター)の時の、あの一瞬無謀だった、若さにまかせてのパワーは、現在の私たちにあるのか、という懸念から「聖書朗読と合唱」による形態(オーケストラ縮小・独唱者省略)を提案していたのですが、どうせやるなら完全な形態で、という団員のみなさんの決意に従うことになりました。

それについては、もはや私主導ではなく、団員の手による運営に全面的に期待したいと思います。

私からの具体的要望としては、次のことをお考えいただきたいのです。まず、私たちの定演は、財政的にはいつも綱渡りの経営で、毎回の収支報告には記されない、

大きなバックアップを含んで成立していますが、一応、1 公演につき 250 万円前後が目安です。《マタイ》の必要経費は、大まかにその 3 倍と見て 750 万円。2007 年までに、ぜひこれだけの資金の積立を実現していただきたいのです。予算 750 万円の負担額は、わかりやすく 100 人の合唱団員出演と想定すると、1 人あたり 75,000 円となりますので、それぞれに自分に応じた支払方法を考えてもらい、一括払いから数十回の分割払い(3 ヶ年 36 ヶ月の均等分割なら月額 2,000 円強)までの計画表に基づいて、合唱団にキープするなどの準備が必要です。

こうしてみると、いかに大変なものが想像できましよう。

けれども、もう 40 年も続けてきた私たちの合唱団としては、それくらいの計画性もなく、運を天にまかせて突入、という手段をとるべきではありません。これをどうやって具体化させるか、それがみなさんの熱意と創造力にかかっているのです。どうぞこれからの 1 回 1 回の定演を、今までとは違った努力で、2007 年の《マタイ》へと繋げてゆけますよう、年頭からさっそく行動を起こされますよう、期待します。

このことは、地道な「世界平和実現」への意欲・努力と直結するものだ、私は信じます。持ち場持ち場で、正しい方向性をもった活動を、世界中の人々と共に持続させてゆくことこそ、21 世紀に生きる一人ひとりの務めといえるでしょう。

イエス ながみ民を 顧みたまえ
われらを支え 歩ましめたまえ
平和を賜え 新たな年に
うれし うれし げにうれし 悩み除くイエス
楽し 楽し げに楽し 主こそ太陽なれ

(カンタータ第 40 番 最終コーラル)

2004 - 2007 年度 定期演奏会予定

	開催予定時期	演奏予定曲目	備考
第 95 回	2004.5.9	BWV77, BWV78, BWV93, BWV99, モテット 4 番	BWV51 - 100 より選曲
第 96 回	2004.12	BWV72, クリスマス・オラトリオ . . .	"
第 97 回	2005 春	BWV116, BWV129, BWV137, BWV147, モテット 5 番	BWV101 - 150 より選曲
第 98 回	2005.12	BWV123, クリスマス・オラトリオ . . .	"
第 99 回	2006 春	BWV180, BWV187, BWV194, BWV197, モテット 6 番	BWV151 - 200 より選曲
第 100 回	2006.12	BWV192, クリスマス・オラトリオ . . .	"
第 101 回	2007 春	マタイ受難曲	創立 45 周年記念公演
第 102 回	2007.12	モテット 1 番, クリスマス・オラトリオ . . .	創立 45 周年記念公演

第 94 回定期演奏会を終えて

強い感動をいただきました

坂本 信之（団員：テノール）

音楽は神の命じた神的な由来をもつ芸術である。バッハは「敬虔な音楽のあるところには、神はつねに恵みとともに現存したもう」と書いている、とある本で読んだ。

音楽は神のもっともすばらしい贈り物の一つであり、悪魔は音楽がたいへんきらいなので、音楽で多くの誘惑や悪い考えを追い払う、悪魔には音楽が耐えられない、そう考えてバッハは多くの宗教曲を作曲したのだろうか。今回、バッハのカンタータとクリスマス・オラトリオを歌うチャンスに考えてみた。

「クリスマス・オラトリオは、聖書のキリスト生誕の記事を主題に、内容的に相互に関連しあった6曲のカンタータからなるオラトリオです」と教えていただいた。練習は時間が過ぎるのが速く、毎回あっという間に終わってしまった。大村先生から楽章ごとの説明があり、その状況をイメージし、感情をこめて歌うように言われた。楽譜の歌詞を理解しようと歌詞を楽譜から書き写し、声を出して読んで先生の言われる情景を思い描こうとした。しかし自分のものにならない個所があり、基本テーマであるキリストの生誕を聖書ではどのように書いているのだろうと、この機会に聖書を読んでみようと思い求めた。

「マタイによる福音書」は、第1章第1節にイエス・キリストの系図から始まっている。系図が書かれている意味は、イエスがアブラハム、ダビデの血統を引き継いだ由緒正しい血筋であることを示している。同章18節以下で「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった」と詳しく書かれている。第2章第1節で「イエスはヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て言った。ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか、わたしたちは東の方でその星を見たので拝みに来たのです」、第3節「これを聞いてヘロデ王は不安を抱いた」、第16節「ヘロデはベツレヘムとその周辺一帯にいた2歳以下の男の子を一人残らず殺させた」とあり、歌詞の理解に役立った。

次の「マルコによる福音書」はどうだろう。ここにはイエスの生誕について一切ふれていない。いきなり洗礼者ヨハネが出てくる。イエスの名前が出てくるのは第1章第9節「そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた」。

「ルカによる福音書」はイエスの生誕を詳しく書いてある。まず第1章第5節の洗礼者ヨハネの誕生の予告から話は展開し、第26節以下にイエスの生誕が予告される。第2章第1節から、なぜベツレヘムの旅籠ではなく、飼い葉桶の中に布にくるんだイエスが寝かされていたのが書いてある（ヨーロッパの広場では、クリスマスに家

畜小屋に寝かされたイエスや羊たちが飾られている。ヴァチカン広場にも、教会の中にも）、皇帝アウグストゥスが全領土の住民に住民登録をせよと勅令を出し、ヨセフとマリアは、住んでいたガリラヤの町ナザレからユダヤのベツレヘムへ登録をするために出かけてゆく途中、ベツレヘムにいるうちに産まれた。これを読んで、イエスがベツレヘムで生まれた理由がわかった。

では最後に「ヨハネによる福音書」を読んでみよう。ヨハネの福音書は第1章第6節「神から遣わされたひとりの人がいた。その名はヨハネである」とヨハネの名から始まっているが、イエスの生誕については触れていない。

4つの福音書で一番古いのは「マルコによる福音書」であり、「マタイ」、「ルカ」はこれを元本としたと言われている。4つの福音書を読んでみて、「マタイ」と「ルカ」はイエスの生誕を詳しく書いているが、それぞれ違ったエピソードで扱っていた。これら2つの福音書を重ねて読むとたいへん興味深い。

この合唱団は「プロテスタントの教会音楽、特にバッハのカンタータはそれぞれの母語で歌うことに意義がある」という趣旨で日本語による演奏をつづけているのですが、その美しい日本語で、憧れのクリスマス・オラトリオを無事、歌い終えることができました。週2回熱心に指導いただいた大村先生、パートリーダーの島津さんを始めテノールの皆さんの励ましのおかげで最後まで歌い終わった。それも、カンタータ40番が終わり、クリスマス・オラトリオに入ると、大村先生が言われた「楽譜はチラッと見て歌詞を頭に入れ、私の顔、指揮を見て歌いなさい」が実行できました。練習のときの先生のお顔とはまったく違って見えました。キリッと引き締まった魅力的なお顔でした。

最後に、使われている楽器について、個人的にはファゴットが好きです。またオーボエもすてきでした。このオーボエは東地中海伝いにビザンツ文化とともに、13世紀以降イスラム文化を通じてヨーロッパに持ち込まれた楽器です。オラトリオ第6部に入りトランペットが高らかに奏でられます。トランペットは天使の楽器として知られています。神やキリストの顕現や啓示として「合図の号令がかかり、天使の声が聞こえて神のラッパが鳴り響くと、主ご自身が天から降って来られる」（「テサロニケの信者への手紙 一」4：16）、「人の子は、大きなラッパの音を合図にその天使たちを遣わす」（「マタイによる福音書」24：31）。

トランペットとティンパニが加わり、終章にもり上がってゆく。満足感、それ以外はなにもありません。

イギリスに滞在していた間に、時間があるとよくコンサートに足を運んだ。しかしバッハの作品を聴いた記憶があまりない。1987年のイースターの休暇に、ライプツィヒがまだ東ドイツであった頃、チェックポイント・チ

ヤーリーでパスポートを取りあげられて2時間待たされ東ベルリンに入った。目的はライブツィヒの聖トーマス教会。ここで聴いた聖歌隊の清らかな声が今でも忘れられない。今回このようなチャンスが与えられたのは、その時から心の奥深くにしまっていた強い願望があったからだろうか。この感激をさらに新たなものにしていきたいと考えています。ありがとうございました。

(2003.12.16)

おたより

佐々木 まり子 様 (アルト・ソリスト) より

昨夜、演奏会終了後‘はやて’にて盛岡駅に降り立ちましたらとても寒く、東京のあの暖かさと別世界でした。今回もよいプログラムをご一緒させていただき感謝しております。

カンタータ第40番の冒頭合唱、本番は音もまるやかになり、むずかしい動きを音、言葉共によくこなしていたと思います。その後のテノールのレチタティーヴォ、バスのアリア、アルトのレチタティーヴォへと、創世記のあのアダムとイヴの蛇をとおしての罪のはじまり、そして解放の預言とキリスト降誕による実現があのような音楽で歌い進められていくのに、演奏者のひとりながら感動いたしました。

今年もバッハ合唱団からクリスマス・メッセージをプレゼントされた思いです。

おたより

上 良康 様 (無任所教師) より

Bach Chor, Tokyo のカンタータとクリスマス・オラトリオの演奏!! 何十年ぶりでしょう。

まず大村恵美子さんのご健闘ぶりに敬意を表します。いろいろ難しい時もあったと記憶しますが、日本語でバッハを歌う志を買ってこられたことお見事です。

次にオーケストラと合唱団の調和が強く印象に残りました。その理由の1つは、合唱団のすばらしい成長と一人ひとりの発声力・発声法の習得と見事なハーモニー、第2はオーケストラが、バッハのカンタータの奏法を見事に身につけられたことです。

こんなことを書くのは失礼なことですが、30年ぐらい前に、トランペットが独奏してどうにもならなかった記憶が残っているからです。

ソリストの声質が揃っていてすばしかなかった。聴衆の最後の拍手が演奏会を評価していました。



2003年 クリスマス会

小野 久美 (団員:アルト)

演奏会の翌日12月8日(月) 目白の練習場(目白聖公会)で恒例のクリスマス会が行われました。大村先生、ピアニストの石代さん、団員22名と室田悠介君、真由ちゃん、計26名の出席者でした。

今年のご都合が悪くお客様が一人もいらっしゃれなかったことが寂しいことでした。

礼拝堂が美しくライトアップされ、練習会場の室内もクリスマスの飾りつけがされていて、すべて利用させていただきとても良かったです。会費で準備した飲物や食物の他、夫々が持ち寄ったもの、出席できない方々からの差し入れなどでテーブルはご馳走でいっぱいになりました。きっとみんなお腹いっぱいになったのではないのでしょうか。

箕浦さん(アルト)の司会で始まり、最初は悠ちゃんと真由ちゃんの出番、大村先生、石代さんにプレゼントをお渡しする役目でした。片岡さん(バス)の音頭で乾杯、その後は和気あいあい飲んで食べながら何人かの「一言」をお聞きしました。演奏会の感想、また荒井さん(ソプラノ)から当初予想されていた30万以上の大きな赤字が6万ほどになったという会計報告があり、みんな少しほっとしました。多くの皆様から支援バザーへのご出品ありがとうございました。

その後はいよいよミニコンサートです。なんといっても今年の主役は真由ちゃんでした。片岡さん(ソプラノ)が悠ちゃんと真由ちゃんと一緒にということでもってこられたリズム楽器(チャイムらしいもの)を少し練習したのがすっかりお気に入りです。やる気充分、ぶっつけ本番の女声コーラスの伴奏にも加わり、片岡さんとの演奏もお父さん(室田 悟さん、バス)の助けを振り切ってやりとげ、お父さんのバスソロ、お母さん(千晶さん、アルト)のピアノ、悠ちゃんのタンバリン、真由ちゃんのチャイム、一家の演奏の時の様子には本当に感動しました。リズムは合っているし、強弱までついてその真剣な様子に涙がでるほど笑いました。その様子が見えなかった両親は残念でした。DNAなのか毎週練習に同行している成果なのか本当に感心しました。一緒に歌える日が楽しみです。

後、川合さん(ソプラノ)のギター弾語り、島津さん(テノール)のオカリナ演奏と独唱、渡辺さん(バス)のフラウト・トラベルソ演奏と独唱と、クリスマス会ならではの演奏が続く時間があっという間に過ぎてしまいました。

大急ぎ全員で後片付け、かなりの早業でした。全員でバッハの宗教歌曲「喜びに輝ける 黄金の日の光は」を1節だけ歌ってあわただしく今年のクリスマス会は終わりました。準備から後片付けまで全員協力で、1年間の締めくくりとして本当に楽しい会になりました。

東京バッハ合唱団の演奏会は何か暖かいものが伝わってくると友人に言われるのですが、こんな会を続けていることもひとつの要因かもしれないと感じました。

オックスフォードの松沢さんを訪ねて

山下 広之(団員:バス)

ご主人がオックスフォード大学で研究されることになったため東京バツハ合唱団を休団され、英国に住まわれているアルトの松沢望さんのお宅を、このほど訪ねる機会があってその元気なお姿に接することができた。

旅行でイギリスを通過する機会があって、団員の川戸さんと家内共ども3人でオックスフォードを訪ねた。去る11月17日朝、ロンドンのヴィクトリア駅をオックスフォード行きのバスで発って約1時間半、牧草に群れる羊や牛などの田園風景を眺めながら終点のグロスター・グリーンで下車し、松沢さんの懐かしい笑顔に迎えられた。

オックスフォード市は人口144,000人の、12世紀からローマンカトリックの修道院を中心に発達してきた町で、現在人口の20%は学生からなる、ケンブリッジと並ぶ学問の都である。それぞれの修道院がカレッジになってきた歴史の変容の中で、39にも及ぶカレッジに学生が属し、それと同時に総合的な組織で学ぶ総称をオックスフォード大学という、他の大学とは違う組織となっている。各カレッジに入学するにはそれぞれ選りすぐった学生が試験を受け、面接を経て合格をするという難関を突破して入学を許されるエリートの大学である。ご主人はペンブロック・カレッジに属しておられる。

お2人が住まわれるのはバンベリーロードという、ドンズ・ハウスといわれていた邸宅が並ぶ一角で、120年前のヴィクトリア王朝時代に建てられた3階建てのレンガ造りが並んでいるところである。カレッジの先生方をドンと呼び、その方々が歴史的に住まわれてきた場所なのでドンズ・ハウスと呼ばれている。1区画が約千坪の広々とした敷地の中の大きな建物で、6家族が借りておられ、その1階がお2人の住まいである。



1階手前が松沢さん宅

我々はそこからちょうど四ツ角をはさんで筋向いの、同じドンズ・ハウスがホテルとなっているパークランドホテルに宿をとった。瀟洒な清潔感のあるホテルである。何よりもお2人の家の目の前というのが便利である。

お訪ねしたのはちょうど昼前で、これから大学へでかけるご主人ともども心尽しの昼食を頂いた。ここに住まわれて2ヵ月になり、まだまだ色々落ち着かない状況もあると推察されたが、大変お元気ですっかりこちらの生活に溶け込んでおられる様子だった。松沢さんもこちらの合唱団に入られて、現在バツハのクリスマス・オ

ラトリオを練習しておられる。約130人の団員からなる合唱団「オックスフォード・ハーモニック・ソサイアティー」で毎週火曜日の夜7時半から9時半が練習である。来る11月29日、町の中央にある1000人収容のタウンホールでクリスマス・オラトリオ第1、2、4、6部を英語

で演奏する予定となっている。また来年4月3日にはヴェルディのレクイエムを、6月19日にはフォーレのレクイエムを演奏するというスケジュールで、なかなか盛んな合唱団である。

さっそく松沢さんの案内で、有名な本屋さん「ブラックウェルズ」やオックスフォードで一番きれいな中庭を持つセントジョーンズ・カレッジを案内していただき、昔の修道院の雰囲気が残る歴史に思いを馳せた。そしてイギリスで一番古いコーヒー店といわれるクイーンズ・レーン・コーヒーハウスで雰囲気のある佇まいを楽しみ、続いてニュー・カレッジのチャペルで開かれている公開の夕礼拝に出席した。6時15分から約30分の音楽礼拝であるが、13人の大学生が指揮者のもとパイプオルガンの伴奏で男声合唱による応答形式のグレゴリオ聖歌を歌うのであるが、まことにきれいで、しかも選りすぐられた学生らしい、引き締まった姿に見とれているうちに礼拝が終わった。最近は学生の出席が少なくなっている傾向にあるようだが、このような伝統が受け継がれているのも素晴らしいことだと思う。

礼拝が終わって夜のオックスフォードの町を散策してからスコットランドの海鮮料理店ロッホ・ファインでスコットランドのビター、デッカーズビールを味わいながらムール貝、ポテトのスープ、生牡蠣、カニ、エビ、シーバスなどを賞味した。店の雰囲気もサービスもさすが親切なスコットランドだなと感じた。

翌日は午前中の時間を利用してカレッジの中で一番大きな規模をもつクライストチャーチ・カレッジを見学させていただいた。15世紀の修道院の佇まいがいまだに残る大きなカレッジで、教会の規模も大きく、ちょうど先生・学生の昼食の準備が進むホール(食堂)売店なども見学した。そして昼食は有名なパブ、創立は1650年(この店では「ナルニア国物語」のC.S.ルイスや「指輪物語」のトルキンがよくここで語り合った)という「イーグル・アンド・チャイルド」でビールを楽しみながら歴史を経てきた昼食のメニューを味わった。

こうして短い時間であったが松沢さんのお忙しい時間を割いていただいて有意義な時間を過ごさせていただき、元気なお姿にも接して無事帰国することができた。



松沢さんが出演する演奏会ポスター